

伊集院静という作家をご存じだろうか。女優夏目雅子さんの旦那さんであり、「世界一受けた授業」をはじめテレビに出演している方なので、見たことがある方も多いことだろう。私は、伊集院さんのエッセーが好きである。その出会いは、東北新幹線の車内誌「トランヴェール」であった。あれは、震災直後だから平成23年の夏だったと思う。出張で東京に向かう新幹線の中で何気なく「トランヴェール」を手にし、ページをめくった。そこには伊集院さんのエッセーがあった。読んでみた。涙が出てきた。それからである。毎月発行される「トランヴェール」を読むようになった。

さすがに毎月新幹線に乗るわけではない。ではどうやって「トランヴェール」を手に入れたか。その当時勤務していた職場に新幹線通勤の同僚がいた。毎月1日になると、自動的に届くようになった。伊集院さんのエッセーは毎月心にしみた。自然と書店で伊集院さんの本を探すようになった。いろいろ読んでみると、よく「家人」という表現が出てくる。そう伊集院さんの奥さんである女優篠ひろ子さんのことである。伊集院さんは、奥さんの故郷である仙台にお住まいである。だから震災を経験しているのである。読んでみると、ご夫妻のお住まいは仙台市の西の山のほう、高台をイメージすることができた。また、文中にはよく飼い犬の「ノボ」が出てくる。伊集院さんが溺愛している犬である。

現在高校3年生になる私の娘が、たまたま仙台市の西の山のほう、高台にある高校に進学した。そう私がイメージする伊集院静さんと篠ひろ子さんご夫妻が住む家のほうなのである。まさかとは思った。しかし、もしかしてとも考えた。とりあえず文面からイメージできる光景を頼りに娘の高校の近辺をうろろしてみた。あった。見つけてしまった。表札はなくても玄関に「NOVO」とあるではないか。これは間違いない。りっぱな邸宅だった。

こんなことがあり、ますます伊集院さんのエッセーを読むようになった。最近の代表作に「大人の流儀」がある。国民的ベストセラーシリーズになっている。気づけば私は1から9まですべて持っていた。現在は「大人の流儀9 ひとりで生きる」が出ている。その67ページに次の一節がある。

この頃、若い人に、若い時にどう過ごしたらいいのかと訊かれる。

自分がやりたいことをしなさい、と言うが、

「やりたいことがわかりません」

と応えられる。私は言う。

「私も自分が何をやりたいのかずっとわからなかった。それでも探し続ければ、不思議なことに何かとぶつかるものだ。大切なのは探し続けようという意志なのだと思う」

人間の一生などというものは、どこで何が起こるかわからないし、どこで歩む道が見つかるかわからないものだ。

大切なのは探し続ける。信じる。希望を失わないことだ。

現在、本校3年生の進路決定が、まもなく100%となる状況である。多くが社会人となり、世の中の荒波にもまれることになる。期待よりも不安の方が数倍大きいことだろう。いろいろなことが起こるにちがいない。辛いとき苦しいとき学校で学んだこと、経験したことは、どれくらい彼らの役に立つのだろうか。まだ未成年である。それでもまわりの人に支えられながらひとりで生きていかなければならない。まだまだ3月1日の卒業までにしてあげられることがあるはずである。